



光と音をつなぐもの

北海道 武田 倅朋

真っ白のワイシャツ。襟回りをぐるりと両手で確認してから袖を通す。スラックスにベルトを通して右手の人差し指で「いち、にい、さん。」聞こえないのに聞こえてくるその声はベルトの穴をなぞりながら、穴の数を数えている仕草だ。

毎朝繰り返されるその風景。高校生の息子の人差し指の動きに気付いた時、私の父の三回忌はとうに過ぎていた。慌ただしい朝の時間。聞こえない息子には、私がワイシャツを軽く振る合図で着替えの時間を知らせている。いつも息子の着替えを見ていた訳ではないから、その仕草に気付いた時のおかしさと心のくすぐったさが病みつきになって、今も時折り横目で見ても懐しんでしまう。

私の父は全盲だった。年老いてから光を失い、長年暮らしたその家でそれまでの記憶と感覚を頼りに、一人静かに暮らしていた。子供たちを連れて遊びに行くと、聞こえない息子はいつも父の膝に乗り、一足先に役目を終えた腫を間近で見つめては、いつしかその目が見えないことを感じ取っていた。

「昼も夜も変わんねえぞ。」と、私たちに心配をかけないように自虐的に笑っていた父。珍しく頼まれて着替えを手伝ったのは、父の兄が亡くなった時のことだった。着慣れないワイシャツ。真つすぐに前を向いたまま、ベルトの穴の数を「いち、にい、さん。」と、心で吹き指でなぞり数えている姿。その見えない目が見つめる先にあるものは、自身の人生への覚悟だと知った。

息子よ。君はそんな父の姿を見たことないはずなのに。光を失った父と音を知らない息子。互いを想い、肌で交わした会話の数々が二人をつなぎ、血となり体中を巡っているのだろうか。その背中や指先に時折り父の姿を見せながら、ゆつくりと静かに大人になっていく息子の心には、父によく似たシャイな優しさが宿っている。